巻/頭/言

“ものづくり”と“Easy to Use”

"Monodzukuri" & "Easy to Use"

野中秀恭
Hideyasu Nonaka

2008年の秋，アメリカに端を発した金融危機によって，世界経済はあっという間に深刻な景気後退に陥った。百年に一度の大不況と言われ，株価が急落し，円高も進行し，“もの”が売れなくなった。“ものづくり”の現場では，余剰となった在庫を減らすために，生産調整がはじまり，工場の稼働率も，設備投資も急速に落ち込んでいった。

あれから１年，先の見えぬトンネルだと思っていたが，昨今，ようやく景気の底を脱し，うっすら明かりが見えてきた。以前の水準に戻るのはまだ先ではあるが，人が生きている以上消費は必ず生まれ，“ものづくり”の現場も持続的に成長することは疑いのないことである。

先般の金融危機をはじめ，雇用・福祉等の社会環境と，地球温暖化等の自然環境の激変の中，“ものづくり”はどこを目指し，我々メーカーは何をなすべきであろうか。“ものづくり”の本質は，製品をつくることだけではなく，価値を創造し，自然にも人間にも優しく，だれもが幸せになれるものでなければならない。

そのために“ものづくり”の現場では，いかに良いものを安く速くつくるか，メーカー各社は日々努力してきた。例えば，QCD(Quality, Cost, Delivery)の追求，多品種変量生産や高付加価値生産等の現場改善である。

しかし，もはやそれは当たり前になってきている。“ものづくり”の更なる進化には，新しいコンセプトを創生し，独創的な技術開発が不可欠であるが，それだけではない。作業者自身や“ものづくり”を取り巻く環境にとっても，優しいものでなければならない。

それは，グローバル化が進み，社会環境と自然環境が激変する中，作業者に熟練工のスキルがなくとも，周りに負荷をかけず，容易に“ものづくり”ができる仕組みづくりでもある。

だれもが，楽に，優しく，心地良く“ものづくり”ができることが求められている。我が国独特の現場の知恵や技を容易に実現できる機能性，ストレスのない楽でやさしい操作性，自然に優しい優れた省エネルギー性能，心地良いデザインとサービス等，“easy to use”が，これからの“ものづくり”には欠かすことのできないものである。

昨今，顧客感動という言葉をよく耳にする。顧客に満足を超え感動をもたらすということであるが，高機能・高性能等に“easy to use”が加えられて，はじめて感動をもたらすことができる。

三菱電機は，多様化するユーザーニーズに応じた“工場”の高付加価値化を実現するためのソリューションの一つとして，“e-F@ctory”による工場の“見える化”を提案してきた。そして，今新たに“e&eco-F@ctory”を展開している。e&ecoのecoとは，言わずもがなecologyのecoであるが，目指すところは自然との調和・共存である。それは，“easy to use”の考えの一つでもあり，我々に与えられた使命でもある。当社は，“easy to use”の考えのもと，世界最高の工場を実現するソリューションを提供していく所存である。

今回の特集では，“easy to use”を目指した最新のFAシステムについて，本号(２月号)と次号(３月号)の２回にわたって述べる。本号では，配線用遮断器等の配電制御機器とNC加工機・レーザ加工機・放電加工機等の加工機について，次号では，プログラマブルコントローラ，プログラマブル表示器，サーボコントローラ等のFAコントローラとそのエンジニアリングソフトウェアについて述べる。

◆常務執行役 FAシステム事業本部長　Executive Officer, Group President, Factory Automation Systems Group